

金井雄一 著

『ポンドの譲位—ユーロダラーの発展とシティの復活』

名古屋大学出版会, 2014年 iv + 329p

前田直哉

1 はじめに

国際通貨論の中で最も重要な課題の一つとして挙げなければならないのは、ポンド・スターリングからアメリカ・ドルへの国際通貨の交替を解明することである。第二次世界大戦後に国際通貨ドルの機能がどのように拡大していったかについては研究成果が着実に蓄積されてきたのに対し、国際通貨ポンドの機能がどのように縮小していったかについての研究成果はそれほど残されていない。その主因は、「金とリンクしていないポンド・スターリングは国際通貨として認められない」や「交換性が制限されているポンド・スターリングは国際通貨ではない」といった固定観念にあると言っても過言ではない。

そのような固定観念に囚われることなく、戦後に国際通貨ポンドの機能がどのように縮小していったかという問題に真正面から取り組み、膨大な一次資料の中から、イギリス当局の現状認識や政策構想を丹念に追って、「通念的ポンド衰退史」を批判的に検討し、「ポンド維持からポンド譲位への転換」という斬新な解釈を提示しているのが本書なのである。

2 本書の構成

本書は以下のように構成されている。

- 序章 ポンドの戦後史
- 第1章 ポンド残高の累積とブレトン・ウッズ会議—戦後苦境乗り切り構想の挫折—
- 第2章 英米金融協定の締結とイングランド銀行の国有化—戦後ポンド政策の前提条件と執行態勢—
- 第3章 交換性回復の失敗と為替管理再強化—スターリング地域維持とポンド擁護—
- 第4章 1949年のポンド切下げ—ポンド復権を目指して—
- 第5章 ヨーロッパ決済同盟と交換性回復—復権

から危機へ—

- 第6章 ユーロダラー市場の発展とシティの復活—ポンドからユーロダラーへ—
- 第7章 1967年切下げとヨーロッパ経済共同体加盟—ポンド政策の動揺・混迷・「収斂」—
- 終章 ポンドの衰退と譲位

3 各章の紹介

第1章では、戦時中のポンド残高の累積と「国際清算同盟案」の作成過程から見た、戦後イギリスの累積ポンド残高への対応の苦慮、為替管理権を巡るブレトン・ウッズ会議前後のイギリスの動向が整理された上で、スターリング地域を維持しながら、ポンド残高の取り崩しを制限する為替管理権を保持したいはずのイギリスが、その喪失につながりうるIMF協定を受け入れたのは何故かという問題が設定されている。著者はこの設問に対して、イギリスがそのような妥協を行ったのは、イギリス代表団団長であったケインズが協定第8条を誤解したためだけでなく、IMF協定の具体的運用を巡って議論する機会があると考えていたのではないか、戦後の現実もまた協定第8条の運用が鋭い問題を引き起こす方向とは別方向に進んでいったという回答を与えている。

第2章では、ポンドの交換性回復の義務付けという意味で、戦後のポンド政策を差し当たり規定した英米金融協定の背景と内容が整理されるとともに、同時期に推し進められたイングランド銀行の国有化の性格と意義が検討されている。著者は、大蔵省とイングランド銀行の間でこれまで形成されてきた協調関係が法的に確認されたこと、また戦前と同様に、ポンド、ロンドン金融市場、シティ金融機関に関わる政策が実施されるにあたって、シティの利害を配慮するという態勢が維持されたことにイングランド銀行の国有化の意義を求めている。

第 3 章では、ポンド衰退を象徴するエピソードとして描かれてきた 1947 年交換性回復の失敗を見直し、その意義が検討されている。著者は、失敗が自明であるはずの早期交換性回復をイギリスが断行したのは、早期交換性回復の困難性をアメリカに理解させ、その再停止後、為替管理体制を再強化し、スターリング地域を維持し、ポンド復権を目指すという思惑があったからではないかと解釈している。

第 4 章では、「通念的ポンド衰退史」に必ず登場する 1949 年ポンド切り下げの意義が見直されている。著者は、1949 年ポンド切り下げは突如として起きた問題ではなく、イギリスが諸外国や国際機関と協議し、それ相当の準備を踏まえた上で実施されたものであったことを明らかにするとともに、その切り下げによって、イギリスとスターリング地域の国際収支は改善したため、イギリス当局はポンド復権政策を強化することになったと指摘している。

第 5 章では、EPU 設立前後と 1958 年交換性回復に至るまでのイギリスの動向が整理されている。著者は、イギリスはこの過程でポンド復権政策を保持し続け、交換性回復を実現したものの、それは逆にポンド衰退を加速させ、ポンド危機の発生につながるものであったと解釈している。

第 6 章では、ロンドンにおけるユーロダラー市場の生成と発展が整理され、期せずして、シティがユーロダラー業務によって復活を遂げ、ポンド衰退にもかかわらず、国際金融センターとして生き延びることになったことが確認されている。筆者は、ポンド維持政策が継続された一方で、ロンドンでユーロダラー市場が勃興し、発展し続けたため、シティがポンド維持政策からポンド譲位政策への転換を容認さえ可能にする状況になってきたことを指摘している。

第 7 章では、ポンド危機の深化としての一つの帰結である 1967 年ポンド切り下げ、イギリスの EEC 加盟、スターリング地域の崩壊が整理され、これらがポンド政策をどのように変容させていったかについて考察されている。著者は、1967 年ポンド切り下げと EEC 加盟問題に直面する中、スターリング地域が終焉を迎え、ポンド維持政策が動揺し、準備通貨ポンドの凋落という現実に向かわれて、イギリスは最終的にポンド譲位政策に転換したと解釈している。

4 コメント

本書では、学界の中でこれまで十分に検討されて

こなかった第二次世界大戦後の国際通貨ポンドを巡る問題が各章で取り上げられ、しかもより掘り下げられていることは特筆に値する。また、その考察を通じて、第二次世界戦後の国際通貨ポンドは一方向的に転落の道を進んだわけではなく、国際通貨ポンドの維持に伴う負担や制約を除去し、福祉国家政策を推進したいという意味での「譲位」の側面もあったとの斬新な解釈も提示されている。更に、本書では、著者が『イングランド銀行金融政策の形成』(1989 年刊行)、『ポンドの苦闘—金本位制とは何だったのか』(2004 年刊行) から取り組んできた問題—「貨幣(信用)はどのように供給(創造)されているか」、「金本位制とは何だったのか」、「中央銀行の金融政策はどのように形成され、発展してきたのか」、「国際通貨の流通根拠とは何か」—についても改めて検討され、一定の回答が与えられている。このような本書の内容全体を評価するのは、評者の能力をはるかに超えることである。そこで評者の専門領域である国際通貨論の観点から、コメントを次の 3 点に絞って出すことにしたい。

まず、著者は、1960 年代半ばから 1970 年代にかけてポンド危機が頻発し、ポンド政策が限界を露呈した結果、ポンドの準備通貨機能は凋落したが、その後もポンドの取引通貨機能は維持されたと指摘している。ただし、前者については詳細に論じられているものの、後者についてはそれほどではない。ポンドの準備通貨機能が凋落する中で、ポンドの取引通貨機能はどのようにして維持されたのであろうか。これは、国際通貨ドルの将来を考える上で参考になりうる歴史的事例であるだけに、より掘り下げて欲しかった問題である。

続いて、1958 年交換性回復後に、ポンド危機がしばしば生じた。著者はポンド相場を不安定化させた要因を専ら交換性回復と国際収支問題に求めているが、潜在的に進行していたインフレ問題、ポンド安予想やインフレ予想がどのように形成されていたかという問題も含めて考える必要があったのではなかろうか。ポンド危機は、ドル危機との対比という意味だけではなく、国際通貨に対する信認は何によって左右されるのかを考える上でも重要な意味を持っているので、これもまたより掘り下げて欲しかった問題である。

最後に、「国際通貨の流通根拠」を金リンクに求めているメタリズムの見解に従えば、ポンドは金とリンクしていなかったから(不換であったから)、

「通貨の過剰発行」を通じて国際収支問題やインフレ問題が不可避免的に発生し、したがって国際通貨ポンドの機能が停止したのは必然的であるということになる。著者はこのような見解を専ら歴史的事実に基づいて批判的に検討しているが、その歴史的事実を踏まえた上で、著者の支持する内生的貨幣供給説に基づいた代替理論が構築されることを求めたいのである。貨幣（信用）が内生的に供給（創造）されているにしても、不確実性は伴うから、インフレ、資産バブル、金融・通貨危機は生じうる。これらの発生ルートが論理的に解明されることによって初めて、メタリズムの見解を論破できるのではなかろうか。その論理的解明はまた、メタリズムとともに、金本位制と管理通貨制についての理解を歪めてきたと著者が批判してやまない貨幣数量説を代表とする

外生的貨幣供給説を論破することも可能にするのではなかろうか。なお、評者は、市場で広範に形成されている予想が織り込まれて、貨幣（信用）が内生的に供給（創造）され続け、通貨当局もそれを容認すれば、インフレあるいは資産バブルに帰結しうると考えている。

いずれにしても、本書刊行の意義が大であることには間違いなく、膨大な一次資料と研究文献の渉猟と吟味を礎として、斬新な解釈を提示しながら、第二次世界大戦後のポンド・スターリングからアメリカ・ドルへの国際通貨の交替を解明した学問的金字塔であると言えよう。

(ノースアジア大学)